

2014年 IWC/日本共同北太平洋鯨類目視調査の実施について  
－IWC-POWER 調査航海：調査船の出港－

平成26年7月2日  
一般財団法人 日本鯨類研究所

1. 経緯

IWC（国際捕鯨委員会）／日本共同北太平洋鯨類目視調査（通称 POWER）は、IWC-SOWER（International Whaling Commission-Southern Ocean Whale and Ecosystem Research：南大洋鯨類生態系調査、1996/97年度～2009/2010年度）プログラムの終了を受け、2010年より北太平洋において IWC と日本との共同で実施されているプログラムです。

2011年の IWC 科学委員会において、本プログラムの名称を、IWC-POWER（Pacific Ocean Whale and Ecosystem Research：太平洋鯨類生態系調査）とすることが決定されました。IWC においては、本調査が IWC 科学委員会（議長：東京海洋大学北門准教授）の主要研究課題をカバーする重要な調査であると評価されています（<http://iwc.int/power>）。

旧 IWC-SOWER は、その前身である IDCR（International Decade of Cetacean Research：国際鯨類調査10ヶ年計画、1978/79年度～1995/96年度）と合わせ32年間（1978/79～2009/10年度）にわたって実施され、南極海のクロミンククジラをはじめとする鯨類資源の資源量とそのトレンドを明らかにするなど、IWC で最も成功した国際共同調査プログラムとして知られています。日本は、長年にわたってこの調査プログラムに対し調査船舶とその乗組員を提供し、その継続的实施に貢献してきました（<http://iwc.int/sower>）。

POWER では、IWC 科学委員会の主要研究課題に則した調査計画が2010年より実施されており、2010～2013年の調査では、それぞれ過去数十年にわたって広域的調査が実施されてこなかった海域において、多数のナガスクジラやイワシクジラが発見され、バイオプシー標本を含めた貴重なデータが収集されました。2014年の今回は、その第5回目の調査航海となります。

2. 調査計画の概要

本件目視調査は、国際捕鯨委員会（IWC）と日本国政府が共同して実施するもので、IWC 科学委員会が調査計画の策定を行い、同委員会内に設置された POWER 運営グループ（コンビーナ：東京海洋大学加藤秀弘教授）が調査の立案と結果の分析を主導します。調査航海実施にあたっては、（一財）日本鯨類研究所が水産庁から委託を受け、これを運営・管理します。本年の調査計画の概要は以下のとおりです。

2.1 主要調査目的：

- (1) ニタリクジラ、イワシクジラ、ナガスクジラ及びその他の鯨種の資源量推定
- (2) ニタリクジラ、イワシクジラ、ナガスクジラ、ザトウクジラ及びマッコウクジラ（更にその他の鯨種）の系群構造に関する情報の収集（特にバイオプシー・サンプル採集と個体識別写真の取得）
- (3) 北太平洋セミクジラ、シロナガスクジラ等希少鯨種のバイオプシー・サンプル採取と個体識別写真の取得

2.2 調査期間：

2014年7月2日－8月30日（60日間）

2.3 調査海域：

北緯30度以北、北緯40度以南、東経170度以東、西経160度以西（公海及び米国EEZ）

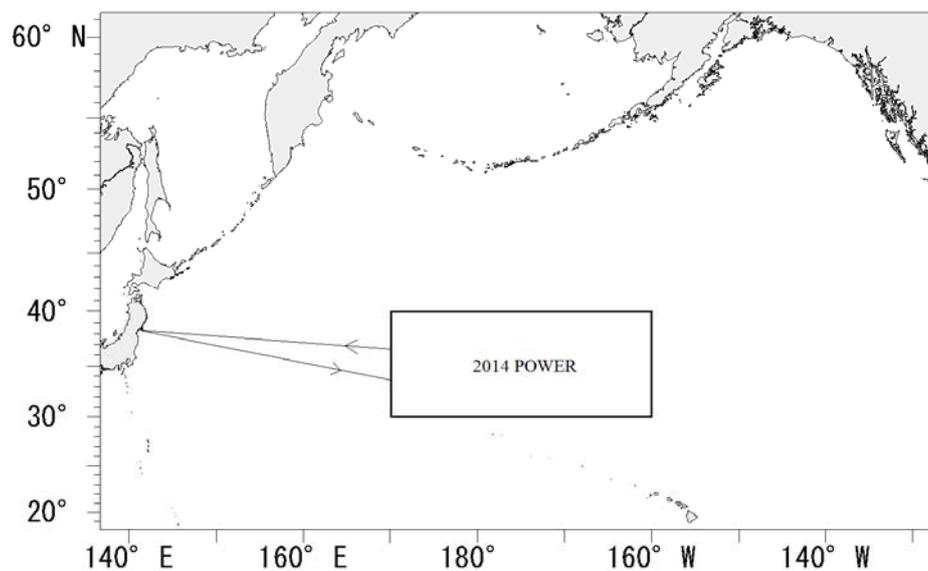


図1. 2014年の調査海域。

2.4 国際調査員：

IWC 科学委員会が指名した下記4名の国際調査員によって調査が行われます。

松岡耕二；日本・調査団長・（一財）日本鯨類研究所

Sally Mizroch；米国・NOAA/NMFS アラスカ漁業科学センター

Jessica Tailor；英国・IWC 選任国際調査員

吉村 勇；日本・IWC 選任国際調査員

2.5. 調査船：

第三勇新丸（742 トン、(株)共同船舶所属、山内善行船長以下 17 名）

2.6. 実施機関：

(一財) 日本鯨類研究所

写真：2013 年度調査の様子



イ)



ロ)



ハ)



ニ)

イ) 浮上直前のニタリクジラ

ロ) ニタリクジラの背部と背びれ

ハ) マッコウクジラの撮影

ニ) 調査海域最東端にて (第三勇新丸アッパーブリッジ)